［別紙 2］

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名　　長 田　洋 和

本研究は，必ずしも重症度と関連しない症状の非定型性により非定型自閉症と診断を受けたもの，および小児自閉症との成人期での横断的比較，および幼少期に初診したものとその後，成人期の予後評価時点でも受診したものでの知的機能および自閉症状の変化の差異をはじめて比較検討したものである．

本研究では，都内某専門機関を連続受診していて 20 歳前後でも受診したものを対象とした．用いた尺度は，全訂版田研・田中ビネー知能検査（TB），乳幼児精神発達質問紙（MDSIYC）および小児自閉症評定尺度東京版（CARS-TV）である．TB の IQ と MDSIYC の言語発達数（DQ）の相関が特に高いという報告をもとに，本研究では，TB が施行できなかった対象者では MDSIYC の言語 DQ を IQ とみなした．さらに，対象者の就学および就労状況についての情報を，カルテより入手した．全対象者において，IQ，CARS-TV 得点，HFPDD の群内比率，および就労状況について成人期に横断的に比較した．また，小学校以前に初診し 10 年以上フォローできた対象者を選出し，初診時と予後評価時（成人期；20 歳前後）の 2 時点における上記変数についての変化量の縦断的な比較を行い，さらに就学および就労状況についても比較検討した．

主要な結果は下記の通りである。

1．小児自閉症 83 人および非定型自閉症 41 人における成人期時点の横断的比較では、年齢，IQ，および就労状況には両者で有意差はなかった．

2．CARS-TV の総得点において CA が AA よりも有意に高く，また，HFPDD の群内比率は AA に多い傾向であった．さらに，CARS-TV の下位項目では，以下の項目で CA が AA よりも高い得点であった．「人との関係」，「情緒」，「身体の使用」，「人間でない対象に対する関係」，「視覚的反応性」，「聴覚的反応性」，「近接受容器での反応性」，「活動性の水準」，「知的機能」，「全体的な印象」．

3．小学校以前に初診し，20 歳前後で受診した対象は，CA 24 人および AA 12 人で，両群間に初診時および成人期の年齢に有意差はなかった．

4．初診時において IQ および HFPDD の群内比率では AA が CA よりも有意に高く、成人期時点では有意差がなかったため、特に、IQ および自閉症状における両者の変化の差を

検討した。

5. 初診時点の IQ を共変量とし，予後評価時点の成人期での IQ への変化量の差異を共っ変量分散分析を用いて検討したところ，AA が CA に比して、有意に下がる傾向が見られた(片側検定).

6. CARS-TV の総得点でも初診時に有意差があり，IQ 同様に CARS-TV の各下位検査において初診時から評価時（成人期）における自閉症状の変化について共変量分散分析により検討したところ，情緒反応， 知覚的反応性，言語的コミュニケーション，および知的機能において，それぞれ変化量に有意傾向があった（すべて片側検定).

7. 就学状況では，小学校および中学校において，AA の方が CA よりも高い水準で就学していたが，高校以降および就労状況では有意差はなかった.

以上，本論文は，小児自閉症および症状の非定型性による非定型自閉症における IQ および自閉症状の変化を初診時から予後評価時点の成人期まで 10 年以上経た 2 時点で縦断的に比較検討した点で独創的である。また、成人期での横断的比較，および縦断的な知的機能および自閉症状の変化を認めたことで，小児自閉症および非定型自閉症の終生的な差異を見出したことで，臨床的鑑別および療育への実践上の有用性をも示唆するもので、学位の授与に値するものと考えられる。